いわゆる「構造改革論」の理論的性格（七）

山本二三丸

まえおき
一　「構造改革論」者による説明
　1　「構造改革」の意味……（以上、第十六巻第四号所載）
　2　「構造改革」の具体的内容……（以上、第十七巻第一号所載）
　3　「構造改革」の条件
　　(イ)　国家独占資本主義……（以上、第十七巻第二号所載）
　　(ロ)　政治的民主主義……（以上、第十七巻第四号所載）
　　(ハ)　戦後世界の構造的変化
　　(i)　「資本蓄積の法則」……（以上、第十八巻第一号所載）
　　(ii)　世界の構造的変化
　　(iii)　「平和と戦争の問題」……（以上、第十八巻第二号所載）
二　「構造改革論」の理論的性格
　1　「平和革命の問題」
　　(イ)　「強力的方法」……（以上、本号所載）
　　(ロ)　「議会的方法」
　2　「構造改革論」の理論的性格

三　要　約

二　「構造改革論」の理論的性格

1　「平和革命の問題」

(イ)　「強力的方法」

(一)

われわれがいま、問題究明のための素材としてとりあげているソ同盟共産党第二〇回大会でのソ同盟共産党中央委員会報告（フルシチョフ）の第一章第六節の表題は、「現在の国際的発展の原則的諸問題（Некоторые Принципиальные Вопросы Современного Международного Развития）となっている。これは、一見、まことに奇妙な言葉である。まず、「国際的発展」というのは、いったい、どういう「発展」なのか？　右の『報告』が第一章「ソ同盟の国際的地位」、第二章「ソ同盟の国内情勢」という順序で述べられているところからみれば、この「国際的発展」とは、おそらく「国内的発展」にたいして用いられている言葉と思われる。だが、「国際的」という規定をもつ「発展」は、言葉そのものとしては成り立ちえようが、しかし、事実としてはありえない。この「国際的」というのは、おそらく、「世界政治経済情勢」という名詞を誤って形容詞にしたものであろう。本来の主語である名詞が形容詞につくりかえられたのは、「発展」に力点がおかれたためと思われるが、しかし、「発展」を強調するならば、「現在の」という規定はおよそ無意味となる。なぜならば、「発展」において決定的な意義をもつものは、「現在の」ものではまったくありえないからである。だが、右の表題にかんしては、まだより重大な問題が残っている。それは、「原則的諸問題」

という言葉である。「原則」とは、人間主体が意識的に設定した行動基準であって、「法則」とはまったくちがったものである。「世界政治経済情勢」の「発展」は、一定の客観的な、歴史的な「法則」にしたがって必然的におこなわれる。この必然的な「発展法則」を科学的に究明し、把握した上で、いかに合目的的に実践すべきか、いかにその歴史的発展に主体的に、合理的にはたらきかけるべきかがあきらかになり、ここにはじめて一定の問題についての一定の行動基準、すなわち、「原則」がうちたてられることになる。つまり、「発展」は「法則」にしたがって必然的におこなわれるのであって、「原則」によっておこなわれるものではけっしてない。「発展」についてまずなによりも第一に決定的に重大なのは、「発展法則」であって、「原則」などではない。このことは、マルクス・レーニン主義のイロハであるが、この点からみるとき、右の表題は、きわめて問題あるものといわなければならない。第一に、それは、「発展法則」の決定的意義を消し去って、それを「原則」によっておきかえるものである。第二に、それは、「発展」が一定の主観的な「原則」によって決定されるものであるとしているものである。そのうえ、『報告』は、これらの「原則的諸問題」が、「現在の諸事件の成行ばかりでなく将来の見透しをも決定するものである」（前出、三四ページ、訳四〇ページ）と強調している。つまり、「平和」と「戦争」の問題についての『報告』の立場＝「原則」にしたがってこそ、「発展」はおこなわれるべきであるし、また「将来の発展」もこれに当然したがうべきであるという主張が、このような形でおし出されているのである。

この「将来の見透しをも決定する」ところの「原則的諸問題」としてあげられている三つの「問題」のうち、最初の二つ、つまり、「二つの体制の平和的共存」および「現在の時期において戦争を未然にふせぐ可能性」については、すでに前稿において、詳細な検討を加えることによって、それらがどのような意味合いにおいて「原則」としてかか

げられているかが、あますところなく明らかにされた。一言でいえば、それらは、マルクス・レーニン主義とはまったく無縁の、むしろ反マルクス・レーニン主義的ともいうべき「原則」、ソ同盟の物質的利益第一主義の反動的「原則」にほかならないものである。ところで、「平和」といい「戦争」といい、それらはすべて、「発展」との関連においてのみ意味をもつ。「国際的発展」を決定するもっとも重大な要因たる「革命」については、右の『報告』の主張する「原則」は、どのように適用されているであろうか？　つぎに、この決定的に重大な意義をもつ「革命」の問題についての『報告』の説明を検討してみなければならない。

四

『報告』の第一章第六節の最後の「原則的問題」は、「さまざまな国の社会主義への移行の形態について（О формах перехода различных стран к социализму.）」という表題をもっている（前出、三八ページ、訳四五ページ）。ここでの問題が当然に資本主義から社会主義への変革、すなわち「革命」にあることは『報告』自身の説明によってもうたがう余地はないのであるが、にもかかわらず「革命的変革」という言葉を避けて「社会主義への移行」という、「平和的」表現が用いられている点は、やはり注目されねばならないところである。というのは、ここにはほんのちょっとした論理的技巧が施こされているからである。周知のように、社会主義とは、資本制的私的所有を廃絶したところの社会的所有を基盤とする社会である。だが、この社会主義社会は、資本主義社会において国家権力をプロレタリアートが掌握し重要生産手段を国有化したからといって、いいかえれば、いわゆる「社会主義革命」によって、一挙につくりだされることはできない。「社会主義革命」と「社会主義社会建設」との間には、長かれ短かかれ、一定の歴

史的な、必然的な過渡期がなければならぬ。つまり、資本主義から社会主義への移行は、歴史的には二つの時期、すなわち「社会主義革命」と「社会主義建設」との二段階から成り立つものである。「平和革命」か「強力革命」かが問題になるのは、いうまでもなく、前者の「社会主義革命」である。ひとたび国家権力を掌握しプロレタリアート独裁をうちたてたところでは、もはや「強力革命」は問題とはならぬ。資本主義から社会主義への過渡すなわち移行は、ここでは当然に「平和的」におこなわれねばならぬ。つまり、「社会主義への移行」の中には、資本主義を強力的に変革する「社会主義革命」と、国家権力を掌握した支配階級たるプロレタリアートの社会主義建設との二つがふくまれるのであって、この二つの「移行」形態は厳に峻別されねばならない。ところが、『報告』は、この二つの「移行」形態を同じ「移行」の言葉のもとにとりあげ、「移行」は「平和的」におこなわれるかどうかなどと論じたてているのである。このような論法は、まことに見えすいたペテン論法といわなければならない。この点は、あらかじめ簡単に指摘しておく必要があるが、さらに行論においてもつねにあきらかにしておかなければならない点である。

そこで、右の「移行」という言葉の用法に留意しつつ、『報告』の説明の内容について吟味してみよう。

『報告』のこの部分は、まず、

「世界の舞台での根本的な変化につれて、諸国と諸民族の社会主義への移行についても、あたらしい見透しがひらけてきている。」（前出、三八ページ、訳四五ページ）

という書き出しではじめられている。

この書き出しは、さきに検討ずみの「世界の構造的変化」と「新たな力関係」とをそのままくりかえしたものであって、なんら新奇なところはなく、またこのような「世界の根本的変化」をもって「新しい見透し」の根拠に仕立て

あげること自体すこぶる問題あるものだということも、あきらかである。

ところで、『報告』は、この「社会主義への移行」の「新しい見透し」なるものを、まず、レーニンの言葉によって裏付けようとこころみる。

「すでに大十月社会主義革命の前夜に、ヴェ・イ・レーニンはこう書いた。『すべての国民は社会主義へ行きつくであろう。それは避けられない。しかし、すべての国民がまったく同一のやり方で行きつくとはかぎらない。それぞれの国民は、民主主義のあれこれの形態に、またプロレタリアートの独裁のあれこれの変種に、また社会生活のいろいろの側面の社会主義的改造のあれこれの速度に、独特なものをもたらすであろう。「史的唯物論の名のもとに」、この点で未来を灰色がかった一色でえがきだすほど、理論的に貧弱で、実践的にこっけいなことはない。これはスズダリ式のぬたくり絵であって、それ以上のものではない』。

歴史の経験は、このレーニンの天才的な命題を完全に確証した。いまでは、社会主義の原則にもとづいて社会を改造する形態には、ソヴェト形態とならんで、人民民主主義の形態がある」（前出、三八ページ、訳四五―四六ページ）。

こに引用されているのは、レーニンの論文『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」とについて』（一九一六年執筆）であって、右の引用箇所のすぐ前には、つぎのような説明がおかれている。

「われわれは経済的要因の優越を認める――しかもまったく正当に認める――、しかし、それをペ・キェフスキー流に解釈することは、マルクス主義の戯画に陥ることを意味している。発展した資本主義のもとでは一様に避けられない、こんにちの帝国主義のもとでのトラストや銀行でさえ、国が異なれば、具体的な形としては同一ではない。まして、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツのような先進の帝国主義国の政治形態は、大体同質であるにもかかわ

らず、なおさら同一ではない。このような多様性は、人類がこんにちの帝国主義からあすの社会主義革命へすすんでいく道の上にもあらわれるであろう」（全集第四版、第二十三巻、五七―五八ページ）。

みられるように、レーニンは、「すべての国民が社会主義に到達する」ことの不可避性を、しかも、この「社会主義へ到達する道」の多様性を、明確に指摘している。ここで注意を要するのは、この「社会主義に到達する道」そのものについてのレーニンの的確な指示である。レーニンは云っている、――「民主主義のあれこれの形態に、またプロレタリアートの独裁のあれこれの変種に、また社会生活のいろいろの側面の社会主義的改造のあれこれの速度に」と。ここに挙げられている三つの言葉、すなわち、「民主主義の形態」、「プロレタリアート独裁の変種（разновидность）および「社会主義的改造の速度」は、すべて「社会主義へ到達する不可避的な道」を示すものであるが、これら三つのもののあいだの関連は、どのようなものでなければならないか、また、それらはどのように関連するものとして挙げられているか？

まず、最初の「民主主義」について。レーニンの右の論文はペ・キエフスキーの「帝国主義的経済主義」の批判にあてられたものであるが、同様の趣旨は、ほとんど時を同じくして執筆された論文『ペ・キエフスキー（ユ・ピャタコフ）への回答』の中にも展開されている。この論文の中で、レーニンは、「民主主義」にたいして「帝国主義的経済主義」が示している軽視的な態度をとりあげ、ペ・キエフスキーの「あらゆる珍妙な論理的誤り、すべての混乱……の真の根源は、彼の考えが戦争によっておさえつけられてしまい、そしてこのおさえつけられた結果、民主主義一般にたいするマルクス主義の態度が、根本的にゆがめられている点にある」（前出、第二十三巻、一二ページ、傍点―レーニン）とし、つぎのように説明を加えている。

「帝国主義は高度に発展した資本主義である。帝国主義は進歩的である。帝国主義は民主主義の否定である。『したがって』民主主義は、資本主義のもとでは『実現不可能』である。帝国主義戦争は、おくれた君主国でも、すすんだ共和国でも、一様に、あらゆる民主主義のはなはだしい破壊である。『したがって』『権利』のことを（すなわち民主主義のことを！）いろいろ言ってもなんの役にも立たない。帝国主義戦争に『対置』することができるのは、『ただ』社会主義だけである。『活路』は社会主義の中だけにある。『したがって』、最小限綱領の中で、すなわちやはり資本主義のもとで、民主主義のスローガンをかかげることは、欺瞞または幻想であるか、社会主義変革のスローガンをあいまいにしたり、遠ざけたり、等々することである。

これが、ペ・キエフスキーのあらゆる不幸の真の根源、彼の意識にのぼってはいないが、真の根源である。これが、彼の基本的な、論理上の誤りである……（中略）。

こういう文句を口にするのは、資本主義と民主主義、社会主義と民主主義の関係を理解していないことをさらけだすものにほかならない」（前出、一二ページ、傍点―レーニン）。

では、「民主主義の問題のマルクス主義的解決」とは、どういうものでなければならないか？　レーニンはこたえていう、――それは、「階級闘争をおこなっているプロレタリアートが、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの勝利、すなわち、ブルジョアジーの打倒を準備するために、すべての民主主義制度とブルジョアジー反対の志向とを利用することである」（前出、一四ページ、傍点―レーニン）と。

では、「民主主義」と「プロレタリアート独裁」との関連は、どうか？

レーニンは同じ右の論文の中で、「民主主義の問題」について、つぎのような説明をあたえている。

「一般に資本主義、特に帝国主義は、民主主義を幻想に変える――だが同時に資本主義は、大衆のなかに民主主義的志向を生みだし、民主主義的制度をつくりだし、民主主義を否定する帝国主義と、民主主義を目指す大衆との敵対を激化させる。**資本主義と帝国主義を打倒することは、どのような、どんなに『理想的な』民主主義的改造をもってしても不可能であって、経済的変革によってのみ可能である。しかし民主主義のための闘争で訓練されないプロレタリアートは、経済的変革を遂行する能力をもたない。**銀行をにぎらないでは、生産手段の私的所有を廃止しないでは、資本主義にうちかつことはできない。しかし、ブルジョアジーから奪いとった生産手段にたいする全人民の民主主義的管理を組織することなしには、全勤労大衆を、すなわち、プロレタリアをも、半プロレタリアをも、小農民をもひきいて、彼らの隊列、彼らの勢力、彼らの国事参加を民主主義的に組織する方向にむかわせることなしには、これらの革命的措置を実行することはできない。帝国主義戦争は、いわば三重の意味で民主主義の否定である。(イ)あらゆる戦争は「権利」を強力におきかえる。(ロ)帝国主義は一般に、民主主義の否定である。(ハ)帝国主義戦争は、共和制を君主制とまったく等しいものにしてしまう)。しかし、帝国主義に反対する社会主義的蜂起の目ざめと高まりは、民主主義的な反抗と憤激との高まりと不可分に結びついている。社会主義は、あらゆる国家の死滅へ、したがってあらゆる民主主義の死滅へ導く。しかし**社会主義は、プロレタリアートの独裁を通じるよりほかには実現されえない。**ところでこの**プロレタリアートの独裁は、ブルジョアジーすなわち国民のなかの少数者にたいする強力と、民主主義の完全な発展**、すなわち、あらゆる国事への、また資本主義廃絶のあらゆる複雑な問題への全国民大衆の、権利を真に同じくした、真に全般的な参加の完全な発展とを結びつけるのである。

民主主義にかんするマルクス主義の学説を忘れたペ・キエフスキーは、まさにこれらの『矛盾』のなかで、混乱し

てしまったのだ」（前出、一三ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

みられるように、ここには資本主義的民主主義の最大限の利用を通じてのブルジョアジーの権力の打倒、プロレタリアートの独裁による、独裁のもとでの人民的民主主義の発展を通じての社会主義社会の建設という、「社会主義への道」がこのうえもなくはっきりと示されている。レーニンは、「民主主義の形態」について、つぎのように結論づけている。

「ブルジョア民主主義の利用を通じて――ブルジョアジーに反対し、日和見主義に反対する、プロレタリアートの社会主義的な、首尾一貫して民主主義的な組織化へ。これ以外に道はない。これ以外の『活路』は活路ではない。マルクス主義はこれ以外の活路を知らない――現実の生活がこれを知らないように」（前出一五ページ、傍点―レーニン）。

ブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義との根本的差異、および前者から後者への必然的発展はプロレタリアートの独裁を通じてのみおこなわれるという「弁証法的」な転化法則は、マルクス・レーニン主義の基本的視点の一つをなすものであって、この視点はレーニンのいっさいの労作を一本の赤い糸のように貫ぬいているものである。

たとえば、その名著『国家と革命』のなかで、レーニンは、エンゲルスの『エルフルト綱領批判』の中の「もしこの世になにかたしかなことがあるとすれば、それは、わが党と労働者階級とが、ただ民主的共和制の形態のもとでのみ支配権をにぎることができるということである。この民主的共和制は、すでにフランス大革命が示したように、プロレタリアートの独裁に特有な形態ですらある」という言葉を引いて、つぎのように述べている。

「エンゲルスは、ここで、マルクスのすべての著作をあざやかに一貫している根本思想、すなわち民主義的共和制はプロレタリアートの独裁にまぢかに接近することであるということを、とくにくっきりした形でくりかえしてい

る。なぜなら、民主的共和制は、――資本の支配を、したがって大衆の抑圧と階級闘争とをすこしも排除するものではないが――不可避的に階級闘争のいちじるしい拡大、展開、露出、激化をもたらすので、いったん被抑圧大衆の根本的利益を満足させる可能性が生じるやいなや、この可能性はかならず実現される。しかも、**プロレタリアートの独裁によってのみ**、プロレタリアートによる被抑圧大衆の指導によってのみ、実現されるからである。第二インタナショナル全体にとって、このこともまた、マルクス主義の『忘れられた言葉』であった。そしてこの忘却は、一九一七年のロシア革命の最初の半年間に、メンシェヴィキ党の歴史によって、きわめて明瞭にさらけだされた」（全集第四版、第二十五巻、四一七ページ、ゴシック体―山本）。

同じ著書のなかで、レーニンは、ブルジョア民主主義について、「とるにたらぬ少数者のための民主主義、富者のための民主主義――これが資本主義社会の民主主義である」（前出、四三二ページ）と規定し、このブルジョア民主主義から人民的民主主義への「生成・転化」がいかにおこなわれるかという点について、つぎのように明確な指示をあたえているのである。

「しかし、自由主義的教授や小ブルジョア的日和見主義者が考えているように、この資本主義的民主主義――不可避的に狭く、貧乏人をこっそりおしのける民主主義、したがって徹頭徹尾、偽善的で、いつわりの民主主義――から、『ますます完全な民主主義へ』と、単純に、まっすぐに、すらすらと発展がおこなわれるわけではない。そうではない。いっそうの発展、すなわち共産主義への発展は、**プロレタリアートの独裁を通じておこなわれるのであって、それ以外の進み方はありえない**。なぜなら、資本家的搾取者の反抗をうちくだくことは、他の誰にもできないし、また他のどんな方法によってもできないからである。

しかし、**プロレタリアートの独裁、すなわち、抑圧者を抑圧するために被抑圧者の前衛を支配階級に組織すること**は、民主主義の拡大をもたらすだけではない。プロレタリアートの独裁は、民主主義を大幅に拡大し、この民主主義ははじめて富者のための民主主義ではなしに、貧者のための民主主義、人民のための民主主義になるが、これと同時に、プロレタリアートの独裁は、抑圧者、搾取者、資本家にたいして、一連の自由の除外例をもうける。人類を賃銀奴隷から解放するためには、われわれは彼らを**抑圧**しなければならないし、彼らの反抗を、**強力**でうちくだかなければならない。そして**抑圧**のあるところ、**強力**のあるところに、自由がなく、民主主義がないことは、あきらかである。

エンゲルスは、ベーベルに宛てた手紙のなかで、このことを美事に表現して、読者も思いだされるだろうが、こう言っている、『プロレタリアートがまだ国家を必要とするあいだは、自由のためにではなく、その敵を**抑圧**するために必要とするのであって、自由を論ずることができるようになるやいなや、国家は存在しなくなります』と。

人民の多数者のための民主主義と、搾取者、人民の抑圧者の**強力的抑圧**、すなわち民主主義からの排除――これが資本主義から共産主義に**移行**するさい民主主義がこうむる形態変化である」（前出、四三三―四三四ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

では、ブルジョア民主主義からプロレタリアートの独裁への「移行」は、なにによっておこなわれるか？　レーニンは、これにこたえていう、―それは、「社会主義のための国内戦（гражданская война）」である、と。

「……ブルジョアジーにたいする国内戦は、少数有産者を敵とする貧民大衆の、民主主義的に組織され、遂行される戦争である。国内戦もまた戦争である。したがって、それもまた不可避的に、権利のかわりに強力をもってこなけ

ればならない。しかし、国民の多数者の利益と権利の名における強力は、まったく別な性格をもっている。それは搾取者、ブルジョアジーの『権利』を蹂躙する。それは、軍隊と『銃後』の民主主義的組織なしには実現されない。国内戦は、一挙に、またまっさきに、銀行、工場、鉄道、大農耕領地、等々を強力的に収奪する。しかし、まさにこれらのすべてを収奪するためには、人民によるすべての官史の選挙、人民による将校の選挙、ブルジョアジーを相手に戦争をする軍隊と住民との完全な融合、食糧の管理や食糧の生産と分配の仕事での完全な民主主義、等々を実施することが必要である。国内戦の目的は、銀行や工場等々の収奪であり、ブルジョアジーの抵抗のあらゆる可能性の根絶であり、彼らの軍隊の撃滅である。だがこの目的は、われわれの軍隊とわれわれの『銃後』で、民主主義がそうした戦争の過程で同時にますます実現され、普及されることなしには、純軍事的な面でも、経済的な面でも、政治的な面でも、達成されえない」（前出、第二十三巻、一四ページ、傍点―レーニン）。

さて、以上レーニンの主要な著作の中からの若干の抜粋を読みあわせその意味内容を正しくくみとるならば、およそつぎのことは、うたがう余地なくあきらかとなるであろう。それは、レーニンが論文『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」とについて』の中で示している「社会主義へ到達する道」そのものは、要するに、「ブルジョア民主主義の最大限の利用――国内戦を通じてのプロレタリアートの独裁の確立――人民的民主主義の全面的展開」をその骨子とするものであって、この基本線そのものは一貫して変るものではないこと、変りうるのは、つまり「多様性」がみられるのは、「民主主義の形態」、「プロレタリアートの独裁の変種」および「社会主義的改造の速度」についてのみである、ということである。

このようなレーニンの主張を、そっくりそのまま引用しながら、『報告』は、その意味内容を正しくとらえようと

はせず、むしろこれを一面的に歪めようとしているのである。

『報告』は、右のようなレーニンの明示する基本線をあきらかにせず、「社会主義への移行」の「形態」には「ソヴェト形態」と「人民民主義の形態」がある、などと述べ立てている。この両形態は、いづれも「プロレタリアートの独裁の変種」にほかならないのであって、この両形態を挙げるだけで右のレーニンの論文からの引用箇所の説明ができたとするのは、当面もっとも肝腎な「移行」の問題点、すなわち「ブルジョア民主主義――国内戦を通じてのプロレタリアートの独裁の確立」の過程をすっかり見落すことになるのであって、レーニンの根本思想をそこなうことはなはだしいものといわなければならない。

『報告』は、「歴史の経験」が「このレーニンの天才的な命題を完全に確証した」として、右の両形態を挙げ、これらの「プロレタリアートの独裁の変種」が東南欧諸国、中華人民共和国、ユーゴ人民共和国に現存しているということを指摘している。つまり、「社会主義への移行」のうちのわずかに「後半の段階」についての事例を並べたている。ところが、「この後半の段階」についての列挙にもとづいて、『報告』の議論は、「前半の段階」にまで、突如として飛躍する。つまり、「プロレタリアートの独裁のさまざまの変種」そのものについての説明が、にわかに、「ブルジョア民主主義―プロレタリアート独裁の確立」という、肝腎要めの「前半の段階」にまで、そのままおしひろげられることになるのである。ここには、レーニンの強調する基本線の歪曲がみられるというばかりでなく、さらには純然たる論理的ペテンが駆使されてもいるようであって、われわれとしては、節をあらためて、仔細に点検してみる必要があると考えられるのである。

(三)

「ソヴェト形態」および「人民民主主義形態」という、二つの「プロレタリアートの独裁の変種」を挙げたところで、『報告』は、つぎのように議論を展開する。

「おそらく、社会主義への移行の形態はますます多様となるであろう。そのさい、これらの形態の実現にはあらゆる条件のもとで国内戦がともなうとはかぎらない。われわれの敵は、われわれレーニン主義者を、つねにどんな場合にでも強力の支持者であるかのようにいいたがっている。たしかにわれわれは資本主義社会を社会主義社会に革命的に変革する必要をみとめている。革命的マルクス主義者が改良主義者や日和見主義者とちがうのはこの点である。いくつかの資本主義国では、ブルジョアジー独裁の強力的顛覆と、それにともなう階級闘争の激化がさけられないことは、うたがう余地がない。しかし、社会革命の形態にはいろいろある。われわれが、強力と国内戦とを社会変革の唯一の道としてみとめているというのは、事実に反する」（前出、三九ページ、訳四七ページ、傍点—山本）。

ごらんのように、『報告』は、「社会主義への移行の形態」が「ますます多様となる」、「社会革命の形態にはいろいろある」という点を強調している。この「社会主義への移行の形態」すなわち「社会革命の形態」に「いろいろ」のものがあるというのは、「強力と国内戦」によるものと、これらによらないものとがあるということだと、『報告』は主張している。このような主張が、さきに『報告』自身引用していたレーニンの基本線とまっこうから対立するものであり、レーニンの主張を完全にふみにじるものであることは、いまさらいうまでもないところである。レーニンが「いろいろ」のやり方といったのは、「民主主義のいろいろの形態」、「プロレタリアートの独裁のいろいろの変

種」および「社会主義的改造のいろいろの速度」についてであって、「ブルジョア民主主義—プロレタリアート独裁—社会主義的改造」という基本線そのものはまったく同一不変のものでなければならない。また、その基本線、とくにプロレタリアートの独裁を中心眼目とする基本線そのものに変りがないからこそ、「いろいろの形態」および「いろいろの変種」が当然に問題となりうるし、また問題とされなければならないのである。

「これらの形態の実現にはあらゆる条件のもとで国内戦がともなうとはかぎらない」という文章は、この『報告』の執筆者たちの狡智を示すと同時に、かれらの救いがたい論理的錯乱をこの上もなくよくあらわしているものである。「これらの形態」とは、レーニンにしたがえば、「ブルジョア民主主義のいろいろの形態—プロレタリアートの独裁のいろいろの変種—社会主義的改造のいろいろの速度」であり、したがって、「これらの形態の実現」においてもっとも中心的な意義を占めるのは、「プロレタリアートの独裁の確立」そのものである。つまり、「これらの形態の実現」には「あらゆる条件のもとで」プロレタリアートの独裁の確立が決定的な地位を占めている。『報告』が「あらゆる条件のもとで国内戦をともなうとはかぎらない」というように述べて、「国内戦をともなうか、ともなわないか」という問題に肝腎のプロレタリアートの独裁の確立の問題をすりかえたのは、まことにみえすいた小手先のペテンといわなければならない。問題の中心は、ブルジョアジーの独裁からプロレタリアートの独裁への移行そのものにある。この移行を問題とするかぎり、つねにかならず、つまり「あらゆる条件の下で」、「どんな場合にでも」、強力と国内戦が中心的意義を占めざるをえない。『報告』が「あらゆる条件のもとで」とか「つねにどんな場合にでも」とかいって、問題がブルジョアジーの独裁からプロレタリアートの独裁への移行そのものにあることをごまかし隠蔽しているのは、うすっぺらな狡智をさらけだすものにほかならない。

『報告』がその歪曲した議論の論拠にと借用したレーニンの論文の中の引用箇所のおかれている同じパラグラフの最初の部分で、レーニンはつぎのように明確に説明している。

「独裁とは、社会の一部分が全社会を支配することであり、しかも**直接に強力に依存して支配すること**である。徹底的に革命的なただ一つの階級としてのプロレタリアートの独裁は、ブルジョアジーを打倒し、彼らの反革命的な企図を撃退するために必要である。プロレタリアートの独裁の問題はひじょうに重要であるから、独裁を否定するか、ロさきだけでそれを承認する人は、社会民主党員ではありえない。しかし、個々のばあいに、例外として、たとえば、すでに社会革命を遂行した大国家の隣にある小国家で、そのブルジョアジーが反抗しても無益だと確信し、首のつながるほうをえらぶなら、彼らが権力を平穏裡にゆづりわたすこともありうるのを、われわれは否定するわけにはいかない。もちろん、それよりもはるかに予想されることは、小国家においても国内戦なしには社会主義が実現されないだろうということである。だから、われわれの理想のうえでは人間にたいする強力は許されないとはいえ、**国内戦を承認することは国際社会民主主義運動のただ一つの綱領でなければならない**」（前出、第二十三巻、五七ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

ごらんのように、レーニンは、社会主義大国家の隣の「小国家においても国内戦なしには社会主義が実現されないだろうということ」の方が「はるかに公算が大きい」と述べ、「国内戦を承認することは国際社会民主主義運動の唯一の綱領でなければならない」と述べているのにたいして、『報告』は、「あらゆる条件のもとで国内戦がともなうとはかぎらない」とか、「つねにどんな場合にでも強力の支持者であるのではない」とかという、一般的おしゃべりを並べたてている。レーニンは、プロレタリアートの独裁の確立という基本線を中心眼目として、ほとんどすべての重

要な歴史的経験とマルクス・エンゲルスの確立した根本的諸命題とをつぶさに考究し、プロレタリア革命の指導者としての立場にたって、「強力と国内戦」という基本的法則を導き出しているのにたいして、『報告』の執筆者たちは、もっぱら「強力」そのものが良いか悪いか、「国内戦」そのものがよいかいけないかということだけを問題とする、全くの小ブル的見地に堕ちこみ、しかも、「われわれの敵」がどう思うか、小ブル的第三者にどう云われるだろうかという点に最大の関心を寄せ、「いや、われわれは必ずしも強力や国内戦にたよるものではないんです」などと弁解じみた言葉を並べたてているのである。なんと恥しらずの「レーニン主義者」であることか！

「われわれは資本主義社会を社会主義社会に革命的に変革する必要をみとめている」という『報告』の言葉ほど、あわれみの情を催させるものはない。資本主義社会が社会主義社会に変ること、そのことが「革命」なのである。「強力」によろうと、「相談づくで平和裡に、民主的に」決議によってであろうと、資本主義社会が社会主義社会に変れば、そのことがとりもなおさず、「社会革命」なのである。だが、ただ資本主義社会が社会主義社会に変ること、つまり「革命的変革」を認めたからといって、これでその論者が「革命的マルクス主義者」だなどとはいえたものではない。「革命的マルクス主義者」が「改良主義者や日和見主義者、および修正主義者」とちがうのは、資本主義社会から社会主義社会への「革命的変革」において、プロレタリアートの独裁を、つまり「強力と国内戦」とによって確立されるプロレタリアートの独裁を中心眼目においている点である。レーニンは、つぎのように教えている。

「マルクスを読みながら、資本主義社会では、すべての尖鋭化した時期には、すべての重大な階級衝突にあたっては、ブルジョアジーの独裁か、プロレタリアートの独裁か、どちらか一つだけしか可能でないということを理解しなかった者は、マルクスの経済学説についても、その政治学説についても、なに一つ理解できなかった人である」（全集第

四版、第二十九巻、二八六ページ)。

『報告』の執筆者たちが、「なに一つ理解できなかった人たち」のみごとなお手本であることは、いまさらいうまでもないところである。いや、ろくに「なに一つ理解できなかった」ばかりではない。かれらは、マルクス・レーニン主義の基本的命題を完全に歪めて、これをカウツキー流の修正主義的謬論にひきづりおろしているのである。

『報告』は再三「社会革命の形態」には「いろいろある」とくりかえし述べたて、しかも「強力と国内戦」とが「社会変革の唯一の道」ではないとの主張をかかげている。もし「強力と国内戦」とが「社会変革の唯一の道」ではなく、他にも「道」があるとすれば、いったい、その「他の道」とは、どんなものであろうか？ それは、当然に、「強力をともなわないもの、国内戦をともなわないもの」つまり、「プロレタリアートの独裁をともなわないもの」、「ブルジョア民主主義にもとづくもの」でなければならないのは、あきらかである。このような「いろいろの道」を考え出し、しかも「いろいろの道」を主張するというやり方は、「社会革命の方法」にかんするカウツキーの主張と完全に瓜二つである。カウツキーは、「社会革命の方法」について、もっぱら、「根本的にちがった二つの方法」すなわち、「民主主義的方法と独裁的方法」との「対立」を論じ、これによって、「プロレタリアートの独裁」にかんするマルクス・エンゲルスの基本的命題を歪め、その内容を骨抜きにしようとしたものである。

カウツキーは、プロレタリアートが「多数者」でありブルジョアジーが「少数者」であり、「多数者が決定し、少数者が服従する」という「民主主義」＝「純粋民主主義」を通じての、つまり「強力」によらないところの、「社会主義的変革」すなわち「資本主義社会の社会主義社会への革命的変革」を説いたものである。レーニンは、このカウツキーの「民主主義的方法」の主張にたいして、独裁にかんするマルクス・エンゲルスの説明をかかげ、つぎのように

これを論破している。

「カウツキーとマルクス・エンゲルスのあいだには、自由主義者とプロレタリア革命家のあいだのような天地の差・がある。カウツキーの述べている純粋民主主義とたんなる『民主主義』とは、『自由な人民国家』の言いかえにすぎない。つまり、まったくのたわごとである。カウツキーは、いとも博学なばか学者のような博学ぶりで、あるいは一〇才の小娘のような無邪気さで、質問する、――多数を占めているのに、なぜ独裁が必要なのか？　と。マルクスとエンゲルスはこう説明する。

――ブルジョアジーの抵抗をうちくだくためだ。

――反動どもに恐怖を感じさせるのだ。

――ブルジョアジーにたいして武装した人民の権威を持続させるためだ。

――プロレタリアートが、自分の敵を強力的に抑圧できるためだ。

カウツキーには、こういう説明がわからない。民主主義の『純粋さ』にほれこんでそのブルジョア性が目につかない彼は、多数者は多数者なのだから、少数者の『抵抗を打ちくだく』必要はない、それを『強力的に抑圧』する必要はない、――民主主義がおかされるばあいを鎮圧すれば十分である、と『徹底的』に主張する。民主主義の『純粋さ』にほれこんだカウツキーは、すべてのブルジョア民主主義者がいつもおかしているあの小さな誤りを、はからずもおかしている。すなわち、彼は、形式的な平等（資本主義のもとでは徹頭徹尾いつわりの偽善的な平等）を事実上の平等と思っているのである！　小さなことだ！

搾取者は、被搾取者と平等ではありえない。

どれほどカウツキーには不愉快であろうとも、この真理は、社会主義のきわめて本質的な内容をなすものである。いまひとつの真理は、ある階級が他の階級を搾取するあらゆる可能性が完全に廃絶されないかぎり、事実上の平等はありえない、ということである」（前出、第二十八巻、二三一―二三二ページ、傍点―レーニン）。

「強力と国内戦とによらない変革の道」すなわち「平和と民主主義の道」を認めるという点で、『報告』の執筆者たちが、カウツキーと同じ修正主義の立場に、マルクス・エンゲルスと「天地の差」のある裏切的立場に顛落していることは、うたがいない。かれらは、「強力と独裁」とが「社会変革の唯一の道」であるという、マルクス・レーニンの基本的命題がまったく理解できないばかりでなく、この命題をその正反対のものに完全にねじゆがめてしまっている。しかも、カウツキーよりもくらべものにならないほどたちの悪いことに、かれらは、この驚くべき歪曲と捏造とをもってマルクス・レーニン主義の教へにもとづくものと強弁しているのである。

(四)

『報告』は、「強力と国内戦」とが「社会変革の唯一の道」でないという、反レーニン主義的主張を裏付けんがために、歴史的「事実」なるものをもってくる。はたして、歴史的「事実」がかれらの反レーニン主義的主張を支持するものであるかどうか、まず、『報告』の説明をかかげてみよう。

「一九一七年四月にうまれた諸条件のなかで、レーニンが、ロシア革命の平和的発展の可能性をみとめたことは、よく知られているとおりである。また、十月革命の勝利ののち、一九一八年の春に、レーニンが平和的な社会主義建設の有名な計画を作成したこともよく知られている。ロシアのブルジョアジーと国際ブルジョアジーとが、わかいソ

ヴェト国家にたいする反革命、干渉、国内戦を組織し、労働者と農民がよぎなく武器をとるにいたったことは、われわれの罪ではないのである。よくしられているように、歴史的情勢のちがったヨーロッパ人民民主主義諸国では、国内戦なしにことがすんだのである」（前出、三九ページ、訳四七ページ）。

まず、「一九一七年四月にうまれた諸条件のなかで云々」について。ここに「一九一七年四月にうまれた」と述べているのは、まったく誤りである。「諸条件」が「うまれた」のは、まさに一九一七年二月二十七日の二月革命以後であり、この二月二十七日以後うまれた「特異の」諸条件の本質について明確な分析をあたえたのは、四月四日にレーニンがおこなった有名な報告、『現在の革命におけるプロレタリアートの任務について』である。（この報告の要綱は、四月七日新聞『プラウダ』第二六号に発表された。いわゆる『四月テーゼ』がこれである）。『報告』が「一九一七年四月にうまれた」と云っているのは、四月十九日―二十一日の昂揚した政治的危機を指してのことと思われる。だが、これらの政治的危機は、「権力が革命的階級へ、革命的プロレタリアートへ移っていく以外には、活路はない」というレーニンの主張を重ねて裏付けるものとして重要な意義をもつものであるが、しかし「革命の平和的発展」の問題そのものの提示には直接かかわりない。この問題は、すでに二月二十七日以後提起され、正しい解決が示されていたのである。では、二月二十七日以後うまれた「諸条件」とは、どういうものであるか？　それは、ひとくちで云うならば、「二重権力」ということである。

右の『四月テーゼ』の中で、レーニンは、二月革命によって生じた「諸条件」をつぎのように特徴づけている、――「ロシアにおける現在の時機の特異性は、プロレタリアートの自覚と組織性とが不十分なために、権力をブルジョアジーにわたした革命の最初の段階から、プロレタリアートと貧農層の手中に権力をわたさなければならない第二

の段階への過渡ということにある」（全集第四版、第二十四巻、四ページ、傍点―レーニン）。

さらに同年四月十日に執筆されたレーニンの論文『わが国の革命におけるプロレタリアートの任務（プロレタリア党の政綱草案）』は、「ロシアの現在の歴史的時機」について「基本的特徴」をあげ、まず「最近の革命の階級的性格」について、

「一　国家機構全体（軍隊、警察、官僚）を指揮するひとにぎりの農奴主的地主しか代表していなかった古いツァーリ権力はうちくだかれ、とりのぞかれたが、まだとどめをさされていない。君主制は正式に廃止されていない。ロマノフ家の徒党は、君主制維持の陰謀をつづけている。農奴主的地主の巨大な土地所有は一掃されていない。

二　ロシアの国家権力は新しい階級の手に、すなわち、ブルジョアジーとブルジョア化した地主との手にうつった。そのかぎりで、ロシアにおけるブルジョア民主主義革命は終了した。」（前出第二四巻、三七ページ、傍点―レーニン）

と述べ、さらに「特異な二重権力とその階級的意義」について、つぎのように述べている。

「五　わが国の革命のもっとも主要な特質、もっとも真剣に熟考しなければならない特質は、革命が勝利した直後に成立した二重権力である。

この二重権力は、二つの政府の存在となって現われている。すなわち、主要な、ほんとうの、現実の、ブルジョアジーの政府、すなわち、すべての権力機関をその手に握っている、リヴォフ一派の『臨時政府』と、国家権力機関をその手に握ってはいないが、人民の明白な、絶対的な多数者を、**武装した**労働者と兵士を直接の拠りどころとしている、ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェトという補足的、副次的な『監督的』政府とである。

この二重権力の階級的源泉と階級的意義とは、つぎの点にある。すなわち一九一七年三月のロシア革命は、ツァー

リ君主制全体を一掃しただけでなく、また全権力をブルジョアジーに引きわたしただけでなく、さらにプロレタリアートと農民の革命的民主主義的**独裁**のすぐまぎわまで到達したということにある。ペトログラードその他の地方の労働者・兵士代表ソヴェトは、まさにこういう**独裁**（すなわち、**法律に基礎をおかず、武装した住民大衆の直接の強力に基礎をおく権力**）であり、しかもまさに前記の諸階級の**独裁**である。

六　ロシア革命の第二の、きわめて重要な特質はつぎの点にある。すなわち、ペトログラード兵士・労働者代表ソヴェトは、すべての点から判断して大多数の地方ソヴェトの信頼をかちえていながら、ブルジョアジーとその階級政府とに自発的に国家権力を引きわたし、臨時政府を支持するという協定をそれと結んで、臨時政府に自発的に優位をゆずりわたし、自分は傍観者、憲法制定議会（臨時政府は、きょうまでその召集の日取りすら発表していない）の召集の監督者の地位に甘んじているということである。

このきわめて特異な、こういう形では歴史上にまだ例のない状況は、二つの独裁――ブルジョアジーの独裁（というのは、リヴォフ一派の政府は独裁、すなわち、法律やあらかじめ表明された人民の意志を拠りどころとせずに、強力による奪取を拠りどころとしている権力であり、しかも、この奪取は特定の階級すなわちブルジョアジーによって実現されているから）と、プロレタリアートと農民の独裁（労働者・兵士代表ソヴェト）とが、いっしょに、一つに絡みあったものをつくりだした。

こういう『絡み合い』が長つづきできないことは、すこしも疑う余地はない。一つの国家に二つの権力は存在しえない。そのうちの一つは消滅しなければならない。そして、ロシアのブルジョアジー全体は、兵士・労働者代表ソヴェトをとりのぞき、無力にし、消滅させるために、ブルジョアジーの単独の権力をつくりだすために、すでに全力を

あげて、あらゆる方法で、いたるところで活動している。

二重権力は、革命の発展途上における過渡的な時機、すなわち、革命が普通のブルジョア民主主義革命をこえて進んだが、しかしまだ『純粋の』プロレタリアートと農民の独裁には行きついていない時機をあらわすにすぎない。

この過渡的な、不安定な状態の階級的な意義（と階級的な説明）は、つぎの点にある。すなわち、すべての革命がそうであるように、わが国の革命も、ツァーリズムとの闘争のために大衆の最大の英雄精神、自己犠牲を要求したが、それとともに未曾有の膨大な数の俗衆を一挙に運動に引きいれたという点である」（前出、第二十四巻、三九―四一ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

では、このような「二重権力」のもとで、なぜ、レーニンは「ロシア革命の平和的発展の可能性」をみとめたのか？

レーニンは、七月事件直後、『スローガンについて』という論文を書いて、その中で「全国家権力をソヴェトにうつせ」というスローガンの意義の歴史的変化について、明快な説明を与えている。そこには「革命の平和的発展」にかんする重要な指摘がふくまれているので、当面関係するかぎりで、つぎに引用してかかげてみることにしよう。

「……このスローガンは、わが革命の永久に過ぎ去った一時期には、つまり二月二十七日から七月四日までは、正しかった。いまは、このスローガンは、あきらかに正しくなくなった。このことを理解しないと、今日の緊切な問題はなにひとつ理解することができない。それぞれのスローガンは、特定の政治情勢の特質の総和から引き出されなければならない。ところで、現在の、つまり七月四日以後のロシアの政治情勢は、二月二十七日から七月四日までの情勢とは、根本的にちがっている。

その当時、すなわち革命のこの過ぎ去った時期には、国家にはいわゆる『二重権力』があった。これは、国家権力が不確定の、過渡的な状態にあることを、実質的にも形式的にもあらわしていた。**権力の問題があらゆる革命の根本的問題である**ことを、忘れないようにしよう。

その当時には、権力は動揺状態にあった。臨時政府とソヴェトが、相互の自発的な協定にもとずいて、権力を分かちあっていた。ソヴェトは、自由な、すなわちどのような外部からの強力もうけない、武装した労働者と兵士の大衆の代表であった。**武器が人民の手にあり、外部から人民に加えられる強力がなかったこと――まさにこの点に問題の核心があった。全革命の平和的な発展の道をひらき、また保障していたのは、まさにこのことであった。**『全権力をソヴェトにうつせ』というスローガンは、この平和的な発展の道をすすむつぎの一歩、すぐに実行できる一歩をあらわすスローガンであった。これは、革命の平和的発展のスローガンであった。この平和的発展は、二月二十七日から七日四日までは可能であったし、また、もちろん、もっとも望ましいものであったが、いまではそれは絶対に不可能である。

どうやら『全権力をソヴェトにうつせ』というスローガンの支持者たちも、このスローガンが革命の平和的発展のスローガンであることを、かならずしもみな十分に熟考したわけではないようである。平和的というのは、その当時（二月二十七日から七月四日まで）には、だれも、どの階級も、どの重大な勢力も、ソヴェトに権力をうつすことに反抗し、妨げることのできるものは一つもなかった、というだけの意味ではない。それだけではない。さらに、その当時には、全一の国家権力を適時にソヴェトにうつしたなら、ソヴェトの内部での諸階級や諸党派の闘争が、もっとも平和的に、もっとも苦痛なしに行われたであろうという意味でも、平和的発展が可能であっただろう。

問題のこの、あとのほうの側面にたいしても、やはりまだ十分の注意が払われていない。ソヴェトは、その階級構成からみて、労働者と農民の運動の機関であり、彼らの**独裁**のできあいの形態であった。もしソヴェトが全一の権力を握っていたなら、小ブルジョア諸層のおもな欠陥であり、そのおもな過誤である資本家にたいする軽信性は、実践において克服され、彼ら自身の諸方策の経験によって批判されたであろう。ソヴェトが**単独の権力**、**全一の権力**をもっていることをもとにすれば、権力を握っている諸階級と諸党の交替は、ソヴェトの内部で平和的に行うことができたであろう。また、すべてのソヴェト諸党と大衆との結びつきは、おそらく、ひきつづき強固であり、弱められることはなかったであろう、ソヴェト諸党と大衆とのあいだの、もっとも緊密な、自由にひろまり、ふかまっていくこの結びつきだけが、ブルジョアジーとの協調という小ブルジョアの政策の幻想の平和的克服をたすけることができたであろうということは、片時も忘れてはならないことである。……

もし権力が適時にソヴェトにうつされていたなら、こういうふうになったかもしれなかったのである。そうなれば、人民にとってはもっともたやすく、またもっとも有利であっただろう。このような道はもっとも苦痛のない道であったろうし、したがってそれを目ざしてもっとも力づよくたたかわなければならなかった。しかし、いまでは、この闘争、権力を適切にソヴェトにうつすための闘争は終った。平和的な発展の道は不可能にされてしまった。非平和的な、もっとも苦痛の多い道がはじまった。

七月四日の転換は、この日いらい、客観情勢がはげしく変った点にこそある。権力の動揺状態は終った。権力は決定的な箇所で反革命派の手にうつった。エス・エルおよびメンシェヴィキの小ブルジョア諸党と反革命的カデットとの協調にもとづく諸党の発展は、この両小ブルジョア党を反革命的な死刑執行の事実上の共犯者、助手にならせてし

まった。小ブルジョアが資本家によせていた無意識の信頼は、党派闘争の発展につれて、小ブルジョアが反革命を意識的に支持することに変った。諸党の関係の発展の周期は終った。……

権力をソヴェトにうつせ、というスローガンは、いまでは、ドン・キホーテ気質か、嘲弄ととられることだろう。客観的には、このスローガンは、人民を欺くものであり、いまでもソヴェトが権力を獲得するには、権力を握ろうと思うか、そうすることを決定しさえすればよいというような、また、ソヴェトのなかには、死刑執行人の助手の仕事で自分を汚さなかった政党がまだいるといった、またおこったことをおこらなかったことにすることができるといった幻想を、人民にいだかせるものであろう」（前出、第二十五巻、一六四―一六六ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

以上、ながながと引用したのは、「革命の平和的発展」のための「諸条件」が実際にどのようなものであったかということが、レーニンの的確な分析によってくっきりと描き出されているからである。なぜ、「革命の平和的発展」が可能であったのか？　それは、当時「二重権力」があったからであり、一方の臨時政府にたいして、これに自発的に国家権力を引きわたしていたソヴェトが武装した人民大衆の直接の強力に基礎をおく権力としてあり、これにたいし外部から加えられる強力が存在しなかったからである。では、どうして、武装した人民大衆の直接の強力に基礎をおく権力、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁をあらわす労働者・兵士代表ソヴェトが存在することになったのか？　これを生みだしたのは、まさに二月革命であり、直接強力に依拠した人民大衆の武装蜂起によるツァーリズムの打倒そのものである。簡単にいえば、ロシアにおいて社会主義革命の道をひらき、これを推しすすめたのは、直接強力に依拠する人民大衆の武装権力であり、一九一七年二月から七月までの間において「革命の平和的発

展」を保障したものも、まさにこのソヴェトの武装権力であったのである。にもかかわらず、ロシア革命における「社会変革の道」としては、「強力と国内戦」ばかりではない、これとは別に「平和的方法」もあるなどと主張する者がいるとしたならば、しかも、このペテン師が「レーニン主義者」などと自称しているとしたならば、われわれはなんというべきか？　レーニンは、ロシア革命を推進し、その発展を保障したものは「強力と武装権力」であると述べている。ところが『報告』は、「強力と国内戦[42]とは、社会変革の唯一の道ではない」と強弁しているのである！

(42)　「人民大衆の武装蜂起」と「国内戦」とはちがう、なぜならば、前者はただ人民が武装しているだけであって、後者は武力衝突が実際におこなわれることだからであると、『報告』は弁解するかもしれない。だが、これほど戦争恐怖症患者にふさわしいたわごとはまたとないであろう。支配階級が武力衝突を敢行してのちに屈伏するか、それとも武力衝突なしに「平和に」屈伏するか、そのいづれにしても、決定的な条件はひとつ――武装した人民の強力であることにかわりはない。武力衝突があったばあいには「社会革命の道は国内戦」であり、衝突がなければ「社会革命の道は平和的方法」であるなどというようにつかいわけるのは、子供だましのペテンといわなければならぬ。

(五)

一九一八年以降のロシア革命の展開にかんする『報告』の説明と主張にしても、これらは、いずれもみな「事実に反する」ものばかりであり、きわめて悪質なものである。

レーニンは、一九一八年四月二十三日の『モスクワ労働者・農民・赤軍代表ソヴェトでの演説』のなかで、「いまわれわれは、革命が苦難の時期に、いな敗北の時期とさえいうべき時期にはいった、異常に苦しい時代にある」と前置きして、「われわれの前には、二つの不倶戴天の敵が大きく立ちはだかっている。すなわち、われわれの前には革

命をめちゃめちゃにしようとする内外の敵が完全に武装してたちはだかり、最後の打撃を加える好機をねらっている。外敵とは、ソヴェト・ロシアにたいする新たな強盗的侵攻の機をねらっている、歯まで武装した、技術力の豊富な国際帝国主義である。そこで、このことをよく覚えておいて、恐るべき真実を容赦なくはっきりと直視しなければならない」と述べて、十月蜂起から当時にいたるまでの革命の任務をつぎのようにまとめているのである。

「勤労人民の十月蜂起の時代、われわれが労働者の前に社会主義革命の赤旗をはためかせたあの時代には、われわれは、容易な、目もくらむばかりの成功の時期をとおった。……当時われわれは、反動的徒党を容易に片づけていた。……反革命とのわれわれの闘争の結果、われわれは、勇猛な点では第一の反革命家コルニーロフが、激昂した部下の兵士に殺されるという事実に現われたような、大勝利を見たのである。

祖国の反革命派と全戦線にわたる広汎な闘争をおこなうにあたって、われわれは、国際ブルジョアジーがぐずぐずしているすきに乗じて、いまでは壊滅した反革命の胴体に、機を失せずに強打をあたえた。国内戦は大体において終った、と確信をもって言うことができる。もちろん、革命の力であるソヴェト権力を打倒しようとする反革命派の部分的な試みによって生ずる個々の小ぜりあいはあるであろうし、一部の都市では、どこかの街頭で撃ち合いがおきるであろうが、しかし国内戦線では反動派は蜂起した人民の努力によって、もはや立ちなおりえないまでに打ちのめされたことは疑いない。こうしてわれわれは、十月の諸事件に端を発する革命の発展の最初の時代を――人を酔わせるような、そして一部の人間を酔わせた成功の時代を――通ったのである。

もういちど繰りかえすが、いまやわが革命の生活における、もっとも困難な、もっとも苦しい時期がやってきた。われわれは、全力を極度にふりしぼって、新しい創造的な活動にあたるという任務に当面している。というのは、い

まのところ巨人的な革命的活動のなかでこのような孤独な、ロシアの革命的プロレタリアートにとって、国際プロレタリアートがわれわれを助けにやってくる救いの時までもちこたえるのに役立つのは、ただ、鉄のような堅忍と労働規律だけだからである」（前出、第二十七巻、二〇二―二〇四ページ）。

さらに、同じ年の春執筆された周知の論文『ソヴェト権力の当面の任務』において、レーニンは、「現在の政局の特色をなしている歴史的転換が、どういうものであるか」、この「転換」がソヴェト権力にたいして、どういう「新しい方向決定を、新しい任務の新しい提起」を要求しているかについての、あますところのない解明を与えている。レーニンは、「ボリシェヴィキ党の第一の任務」は「大多数の人民に自分の綱領や戦術の正しさを納得させること」であり、「第二の任務」は「政治権力を獲得して、搾取者の反抗を弾圧すること」であるが、これらの二つの任務は「大体においてすでに解決された」とみることができると述べ、ついで「第三の任務」をつぎのようにかかげている。

「いまや当面の任務として、しかも現在の時機の特色をなす任務として、第三の任務が、すなわちロシアの管理を組織するという任務が、日程にのぼっている。いうまでもなく、この任務は一九一七年十月二十五日のその翌日からわれわれが提起し解決してきたのであったが、しかしいままで、搾取者の反抗がまだ公然たる国内戦という形態をとっていたあいだは、管理という任務は主要な中心的な任務とはなりえなかったのである。

ところがいまは、それがこういうものになった。われわれボリシェヴィキ党は、ロシアを説得した。われわれは貧乏人のために金持の手から、勤労者のために搾取者の手から、ロシアをたたかいとった。われわれはロシアを管理しなければならない。そして現在の時機のいっさいの特色、いっさいの困難は、人民を説得し搾取者を軍事的に弾圧す

るという主要な任務から管理という主要な任務への移行の特殊性を、理解することである。

世界史上にはじめて、社会主義政党は、権力の獲得と搾取者の弾圧という事業を、大体において完了することができ、管理という任務に直接とりかかることができるようになった。われわれは、社会主義的変革のこのもっとも困難な(またもっともやりがいのある)任務をやりとげるにふさわしいものであることを示さなければならない。管理を首尾よくやっていくためには、説得する手腕のほかに、国内戦に勝利する手腕のほかに、実践的に組織する手腕が必要であることを、よく考えなければならない、これはもっとも困難な任務である。なぜなら、幾千万という人々の生活のもっとも深い経済的基礎を新しく組織するということが、問題だからである。しかもこれは、もっともやりがいのある任務である。なぜなら、この任務が解決された（大体において）のちにはじめて、ロシアはただソヴェト共和国になったというだけでなく、社会主義共和国になったということができるからである」（前出、第二十七巻、二一四ページ、傍点―レーニン）。

強力と武装蜂起とによって権力の獲得と搾取者の反抗の弾圧という任務が正しく解決されたときに、そこにはじめて社会主義社会を建設するという、実際的な任務が提起されねばならないし、しかも、この二つの任務を提起し遂行できるのは、ソヴェト権力という強力のみである。搾取者の反抗の弾圧が文字通り反革命活動の破壊であり、社会主義社会の組織が平和的建設であるのは、いまさらいうをまたない。この両者は、社会主義革命の発展にとって必然的な二つの段階であり、いわば法則である。にもかかわらず、前者と後者とを同じ「社会変革」のための二つのことなった道だとして、前者が「強力と国内戦による社会変革の道」であり、後者は「平和的建設による社会変革の道」であり、別々のものだ、などと主張するものがいるとしたら、これほどみえすいた論理的ペテン、これほど程度の悪い

マヤカシ論法はまたとありえないであろう。

『報告』の関心は、革命をいかに発展させるかなどということの上にはまったくなく、もっぱら「戦争か、平和か」、「国内戦をやるか、やらぬか」の上にだけ集中している。一九一七年大十月革命以後におこなわれた「国内戦」は、いずれも反革命派＝搾取者どもの手によってひきおこされたものであって、それが革命を挫折させ、ひっくりかえすためのものであることは――直接公然、強力的にか、あるいは、間接隠然にかというちがいはあるにせよ――、あらゆる種類の意識的サボタージュ、犯罪、買収、投機等々と、本質においてはまったくかわりない。つまり、十月以降の「国内戦」は「反革命の道」の一つにすぎない。だが、現在問題となっているのは、「社会変革のための道」である。『報告』の執筆者たちが、「戦争」を恐れるのあまり、「革命のための戦争」と「反革命のための戦争」とを同じものとしてとりあげ論じているのは、なんとみじめで、こっけいなことであろう！　しかも、なさけないことに、この執筆者たちは、「労働者と農民がよぎなく武器をとるにいたったことは、われわれの罪ではない」などと、弁解がましい言葉を並べたてている。まるで、二人の人間がなぐり合いをして、第三者によってどちらが悪いか、なぐり合いをしたのはどっちの罪であるかを判定してもらう場合そっくりである。いったい、どういう第三者がいて、判定を下してくれるというのか？　この地球上には、革命を推進する者と革命を阻止し挫折させようとする者、「われわれ」と「われわれの敵」としかいない。この両者の間での生死をかけたたたかいがあるだけである。「われわれ」は「われわれ」自身の力によって、――したがってまた武力干渉にたいしては武力反撃をもって、つまり「国内戦」によって――反革命のいっさいの企図を弾圧しなければならない。いったい、第三者の判定なり、同情が革命党にとってどれだけプラスになるというのか？　『報告』は、「革命」の立場を明確にしていっさいの人民をレーニンの提起した任

務にしたがって「説得」するのではなくて、善意の小ブルジョアたちに、「どうです、われわれは自分から武器をとったのではありません、われわれには罪がないではありませんか」と云って、公平な—「民主的」な—同情と支持を当てにしているのである。なんと、「民主主義的」小ブルジョアに媚を売る、堕落した「レーニン主義」者どもではあるまいか！

さらにまた、『報告』は、「よく知られているように、歴史的情勢のちがったヨーロッパ人民民主主義諸国では、国内戦なしにことがすんだのである」といっている。いったい、これは、いつのことなのか？　また、なんのために、こんな文章を並べたてたのか？　ヨーロッパ人民民主主義諸国において、人民的権力—すなわちプロレタリアートの独裁のひとつの変種—が確立したのちにおいては、「社会変革の道」としての「国内戦」がもはや問題とならないことぐらい、どんな子供にでもわかることである。だが、「強力」はいぜんとして「社会変革の道」の根幹であることはやめない。およそ人民民主主義国家の存するかぎり「強力」が「社会変革」の「主要な道」のひとつであることに変りはない。だが、もし、ヨーロッパ人民民主主義諸国において、それらが「資本主義社会から社会主義への移行」の過程において「国内戦なしにことがすんだのである」などといったら、それこそ物笑いであろう。これらの諸国は、いづれも第二次大戦の過程において、ソヴェト軍およびこれと結んだパルチザンによる武力闘争を通じて大地主および独占資本家と結託したナチス・ドイツ軍を撃破することによって人民的権力を樹立したものであって、人民民主主義国家の樹立への道は、一にかかって「強力と国内戦」とを通じてきりひらかれたものといっても過言ではない。

要するに、『報告』は、最初から最後まで、いかにプロレタリアートの独裁をうちたてこれを強化することによって社会主義的改造をおしすすめるかという、革命の根本的問題をすこしもとりあげようとはせず、小ブル的平和主義者にふさわしく、もっぱら、「平和か、戦争か」にのみ注意を集中し、かれら自身は「平和」派であることを強調して小ブル的大衆の支持をかきあつめようとつとめているのであって、この目的のためには手段を選ばず、権力獲得以前と権力獲得以後とを意識的に混同し、独裁の中心的意義そのものを抹殺してしまうこともあえて辞さないのである。

このような骨の髄からの小ブル的修正主義の本質は、『報告』のつぎの主張の中にも端的に示されている。

「レーニン主義は、支配階級がみずからすすんで権力をゆずることはしない、とおしえている。しかし、闘争がどの程度に烈しくなるか、社会主義への移行に強力をつかうか、つかわないかは、プロレタリアートの態度によってきまるものではなく、むしろ搾取者がどの程度に抵抗するか、搾取者階級自身が強力をつかうかどうかによってきまるのである」（前出、三九ページ）。

諸君、よくお聴きいただきたい。「強力（насилие）」をつかうかつかわないかは、プロレタリアートの態度によってきまるのではなくて、搾取者の反抗の程度によってきまるものだ、そうである。では、おうかがいするが、「プロレタリアートの独裁」とは、いったい、なんであるか？　レーニンはいう、――「独裁は、直接に**強力**に立脚し、どんな法律にも拘束されない権力である。プロレタリアートの革命的独裁は、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの**強力**によってたたかいとられ維持される権力であり、どんな法律にも拘束されない権力である」（前出、第二十八巻、二一六ページ、ゴシック体―山本）。では、「直接強力に立脚する権力」は、どのようにして獲得されるのか？

「強力」によって以外に、どのようにして獲得されるというのか？　『報告』は「支配階級」「搾取者」という文字を並べているが、いったい、「支配階級」とか「搾取者」は、なにによって勤労人民を搾取し、抑圧し、支配しているのか？　いったい、「強力」なしに、しかも、「武装した強力」なしに、「支配階級」＝「搾取者」はその支配を維持し、「権力」を保持していることができるか？　では、「武装した強力」によって支えられた「支配階級」の「権力」を打倒して、プロレタリアートの「直接強力にもとづく権力」をうちたてることは、「強力」も「武力闘争」もなしに、どうやっておこなわれるのか？　勤労大衆が「断固たる決意」を示しさえすれば、それで「支配階級」は「強力」をつかわず「反抗」することなく、「平和」に「革命的変革」(!!)に賛成する、とでもいうのか？「強力」によってのみはじめて「支配」を維持している当の「支配階級」が、「強力」をつかうか、つかわないか、などということが、はたして、問題になりうるであろうか？　力のあらんかぎりいっさいの力を傾けて、とくに国際帝国主義の支援のあるかぎり、最後まで自己の「支配」を確保し、革命を挫折させるために「抵抗」してやまないところの「搾取者」をつかまえて、「搾取者がどの程度に抵抗するか、搾取者階級自身が強力をつかうかどうか」などを問題にするとは、なんと見下げはてた「平和至上主義者」であることだろうか！

こういう腑ぬけな、しかしまたきわめて悪質な「レーニン主義者」の小ブル的妄想にたいしては、レーニン自身の明確な教示を対比しないではいられない。レーニンは、さきに挙げた論文『ソヴェト権力の当面の任務』のなかで、つぎのように述べている

「**資本主義から社会主義へ移行するさい**にはいつでも二つの主な原因によって、あるいは二つの主な方向において**独裁**が必要であることは、確信するのに困難でない。第一に、搾取者の反抗を仮借なく弾圧しなくては、資本主義に

うちかって、これを根絶することはできないからである。搾取者からその富を、組織性や知識というその優位を、一挙に奪いとることはできない。したがって、彼らは必らず、かなり長期にわたって、憎らしい貧民の権力を覆えそうと企てるだろう。第二に、あらゆる大革命は、とりわけ社会主義革命は、たとえ対外戦争がなかったにしても、対内戦争、すなわち国内戦争なしでは考えられないからである、国内戦は、対外戦争よりもいっそう大きな崩壊を意味し、数千、数百万件にものぼる動揺や一方の側から他方の側への寝返りを意味し、この上なく不確定な状態、落ちつかない状態、混沌を意味する。そこで、いうまでもなく、旧社会のすべての腐敗分子は、このような深刻な変革のさいには、『その本領を発揮し』ないわけにはいかないのである。だが腐敗分子が『その本領を発揮する』とは、犯罪や乱暴狼籍、買収や投機、あらゆる種類の醜行が増大すること以外の何物でもありえない。それを収拾するには、時間が必要であり、鉄腕が必要なのである。

歴史上の大革命で、人民がこのことを本能的に感じとらなかったり、また泥棒を犯罪の現場で射殺することによって有益な毅然さを示さなかったようなものは、一つもない。……

あらゆる革命のこの歴史的経験、世界史的な—経済的および政治的な—この教訓を、マルクスは総括して、簡単な、鋭い、正確な、明瞭な定式、すなわち、**プロレタリアートの独裁**をいう定式にした」（前出、第二十七巻、二三四—二三五ページ、傍点—レーニン、ゴシック体—山本）。

これとまったく同じ思想は、論文『プロレタリア革命と背教者カウツキー』の中でも、うたがう余地なく明確に展開されている。レーニンはそこで、「中心部の蜂起が成功するか、軍隊が反乱を起すばあいには、搾取者を一挙に撃破する（разбить）ことができる。しかし、恐らくごく稀な場合を除けば、搾取者を一挙になくす（уничтожить）こ

とはできない」とし、その根拠として、「搾取者が、変革ののちにも、長い間、不可避的に、幾多の非常に大きな事実上の優越を保っている」こと、および「搾取者の国際的な結びつきが、非常に大きい」ことを挙げ、ここからつぎのような「歴史的真理」を教示しているのである。

「こういう事態であるのに、いくらかでも深刻で重大な革命のさいに、少数者と多数者との関係が、いとも簡単に事を決定するものと予想することは、この上ない低能であり、平凡な自由主義者の愚劣きわまる偏見であり、大衆を欺き、明白な歴史的真理を大衆にかくすことである。**この歴史的真理とは、あらゆる深刻な革命のさいには、多年被搾取者にたいして大きな事実上の優越をたもつ搾取者は、長期の、頑強な、死にものぐるいの抵抗を示すのが原則である、ということである**。おめでたい馬鹿者カウツキーの甘い空想のなかででもなければ、搾取者は最後の必死の戦闘で、あるいは一連の戦闘で、自分の優越性をためしてみずに、多数を占める被搾取者の決定に服することは、けっしてしないのである。

資本主義から共産主義への移行は、歴史的な一時代である。この時代が終らない間は、搾取者には必然的に再興の望みが残されていて、この望みは再興の企てに転化する。そして、最初の重大な敗北の後には、自分が打倒されることを予期せず、そうしたことを信ぜず、またそれについて考えようとさえしなかった、打倒された搾取者どもは、十倍の精力と狂暴な熱情と百倍にも増した憎しみをもって、奪いとられた『楽園』をとりもどすために、今までは非常に楽しい生活をしてきたのに今や『平民の無頼漢』から零落と貧困（あるいは『卑しい』労働）の運命を負わされたその家族のために、戦闘に身を投じる。そして、この資本家である搾取者どもの後ろには、小ブルジョアジーの広汎な大衆がついていく。すべての国の数十年にわたる歴史的経験がこの小ブルジョアジーについて証明しているように、

彼らは動揺し、ためらい、今日はプロレタリアートにしたがうが、明日は変革の困難に恐れをなし、労働者が敗北するか、半ば敗北するや否や、あわてふためき、神経過敏となり、いらいらし、悲鳴をあげ、転々としてひとつの陣営から他の陣営へうつる……わがメンシェヴィキとエス・エルのように。

しかも、事態がこうであるのに、数百年、数千年の特権の存否の問題が歴史によって日程にのぼされる死にものぐるいの、はげしい戦争の時代に、多数者と少数者、純粋民主主義、独裁の不必要、搾取者と被搾取者との平等を説く!! こういうことをやるには、なんという底なしの低能、はかりしれない俗物根性が必要なことだろう!

だが、一八七一年から一九一四年にいたる比較的『平和な』資本主義の数十年は、日和見主義に順応している社会主義諸党のうちに、俗物根性と狭量と背教とのアウギウスの厩を蓄積したのである。」（前出、第二十八巻、二三二—二三四ページ、傍点—レーニン、ゴシック体—山本）。

われわれは、このレーニンの最後の文章の趣旨に準じて、同じくつぎのように云うことができるであろう。——「第二次世界大戦終結以後における社会主義および資本主義の比較的『平和な』発展の十数年は、マルクス・レーニン主義の真髄を把握しえない、小ブル的偏向に毒されたマルクス主義諸党のうちに、俗物根性と修正主義と背教とのアウギウスの厩を蓄積したのである」と。

さらにまた、レーニンは、その論文『古いものの崩壊におびえる人々と、新しいもののためにたたかう人々』（一九一七年十二月）のなかで、「歴史的な見通しを理解することができない」で、国内戦にまで発展した階級闘争の激化によって「おしつぶされ、肝をつぶし、おびえているブルジョア、小ブルジョア、『ブルジョアに仕える者』」が「社会主義の——（平和的な—山本）——導入」という「古臭い、ばかばかしい、センチメンタルな、月なみのインテリ

ぶった観念に支配されている」ことを嘲笑して、「われわれマルクス主義者にとって、計画はもとより、このような思想は縁もゆかりもない」と述べ、つぎのように強調しているのであるが、『報告』の論調は、なんと右の「古臭い、ばかばかしい、だがきわめて悪質な、修正主義的観念」をそっくりそのままあらわしていることであろうか。

「われわれは、社会主義を『導入』することはできないこと、社会主義は、もっとも緊張した、もっとも尖鋭な、兇暴なまで、死にものぐるいであるまでに**尖鋭な階級闘争と国内戦**の過程で成長するものだということ、資本主義と社会主義のあいだには『生みの苦しみ』の長い時期があり、**強力**は、つねに旧社会の助産婦であり、ブルジョア社会から社会主義社会への過渡期には、特殊な国家（すなわち、ある階級にたいする**組織的な強力**の特殊な体制）、すなわち**プロレタリアートの独裁**が照応しているということを、つねに知っていたし、そう言ってきたし、またそうくりかえしてきたのである。ところで、この独裁は、おさえつけられた**戦争状態**、プロレタリア権力の敵にたいして**軍事的闘争手段**をとる状態を前提し、それを意味している。コンミューンはプロレタリアートの独裁であった。そしてマルクスとエンゲルスは、コンミューンを非難して、コンミューンが搾取者の抵抗を鎮圧するためにその軍事力を十分精力的に行使しなかったという事情を、コンミューンの滅亡の原因の一つと考えた」（前出、第二十六巻、三六二ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

ところが、なんと驚いたことに、ここにレーニンの直弟子と称する連中が出てきて、「強力と国内戦」は「社会変革の唯一の道」ではない、「強力と国内戦」によらないでそれとはまったく別の「議会的方法による平和の道」もあるとレーニンが教えているのだと、宣伝してまわることになったのである！

（一九六四・八・一六）